

## ワークショップ

「人の造りしもの」の科学と哲学—社会科学・工学の哲学の観点から—

オーガナイザー：伊勢田哲治（京都大学）・出口 弘（東京工業大学）

提題者：出口 弘（東京工業大学）

徳安 彰（法政大学）

斉藤 了文（関西大学）

### ワークショップ趣旨

科学基礎論学会では60周年記念シンポの一つとして、社会科学の哲学と工学の哲学をひとまとめとしたワークショップを開催した。そこでの観点は、これまで科学基礎論学会であまり取り上げられてこなかった二つの分野を今後どのように盛り上げて行くかということであった。

しかしただ単にこれまであまり取り上げられてこなかったという以上に、社会科学の哲学と工学の哲学には接点があるように思われる。その一つは、社会も人が造ったものであり、また人が手を加えていくことができる対象であるという意味で、工学的な分析を許す対象ではないかという視点である。さらに目を広げれば、人間が造り、手を加えることができるものの範囲は拡大しつつあることが分かる。たとえば合成生物学の分野における生命もまたそうした対象になりつつあるし、地球環境そのものも、人間の手になるものという性格を強めつつあると言えるだろう。

もちろん、社会を人間が「造る」というときの「造り方」は工業製品や合成生物学における生体システムの「造り方」とは異なっている。あるコミュニティを形成する際に、そのメンバーはそのコミュニティを意識的に「造る」とは限らないし、また、「造る」際に工具を使って何かを整形したりするわけでもない。さらに言えば、人間が社会を「造る」以上に社会が人間を「造る」側面が強いことはこれまで社会学で繰り返し指摘されてきたことである。

しかし、そうしたさまざまな違いを超えて、何かしら「人の造りしもの」を対象にしている研究分野に共通する特徴というものは十分ありうるのではないだろうか、そしてその観点から社会科学の哲学と工学の哲学の接点を探るのみならず、それらを含みながらそこにとどまらない科学哲学の一分野を切り開くことができるのではないだろうか。そうした問題意識を持ちつつも、とりあえずはまず、社会科学、工学、合成生物学などの分野の現状をこうした問題意識から見直してみる、というところから今回のワークショップははじめてみたいと考える。